

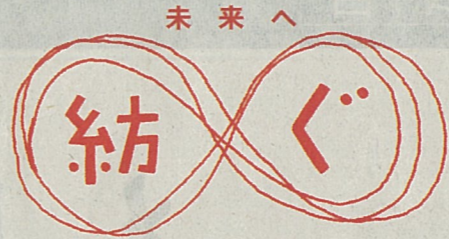
広告

企画・制作 / 読売新聞社広告局



福島県相馬市の田園で子ども記者と談笑する復興支援センター「MIRAI」の黒田夏貴さん(写真右から2人目)、大野村農園の菊地将兵さん(同5人目)、学生団体「trees」代表の深谷華さん(同6人目)

古里再興一歩ずつ前へ



未来へ
リレープロジェクト

主催 / 読売新聞大阪本社
後援 / 福島県、宮城県、兵庫県
協賛 / 新コスモス電機、大和リース、
鎮守の森のプロジェクト

神戸から東北へ 被災6年目の今を知る旅

きょう「防災の日」

阪神大震災を経験していない神戸・阪神間の子どもが東北の被災地取材し、防災への思いを新たに。「未来へつぐり」プロジェクト。3回目となる今年は、小学生と保護者の8組16人が8月1〜2日、宮城県と福島県を訪れ、被害を乗り越えて、古里の再興へと歩み始めた住民らに出会った。

安全な暮らし 自分の力で

子ども記者がまず訪れたのは、津波被害が大きかった宮城県名取市閑上地区の復興のシンボルとして、地元の朝市をいち早く再開させた櫻井広行さん(62)は防災教育にも力を入れており、「地震から津波到達まで1時間あり、すぐ逃げれば地区のみんなが助かったはず。命は自分で守るしか



現地を襲った津波と同じ高さ(8.4m)の名取市閑上の慰霊碑。種の慰霊碑から発芽した「芽生えの塔」が伸びていく姿を表す

ない」と訴えた。慰霊碑や地区を一望する日和山などを巡り、被災時の様子を語った。その後、仙台市内の「津波避難タワー」(定員300人、約10分)を訪ね、震災後進む防災対策にも触れた。福島県では、原発事故による風評被害に負けまいと、「食」の魅力発信に取



①仙台市津波避難タワー。現在市内に3基設置されている
②300羽の鶏が自由に暮らす養鶏場で子ども記者も餌やりにも挑戦

り組む相馬市の人々を訪ねた。地元産品の詰め合わせを全国発送している学生団体「trees(ツリース)」の深谷華さん(20)らに取材。農家の取材レポートと一緒に発送しており、「風評に負けずに頑張る生産者の熱い思いも届けたい」と語った。

を体験。周囲の反対を押し切り、震災後にUターン就職した理由を「他県と同じような農産物では福島産は売れにくい。それなら、ここにしかない物を生み出したい」と覚悟をみせた。福島市の「除染情報プラザ」では、放射性物質を減らす取り組みについて学んだ。

同プラザアドバイザーの青木仁さん(64)は放射性物質の自然半減には30年かかるものもあると説明し、「安心して生活できるように、頑張るって人間の方で減らさないと」と力を込めた。東京電力ホールディングス福島復興本社の田添邦彦さん(48)は、どのように事故が起きたかと、30〜40年続く廃炉の工程を解説した。

未来担う若い力育てる



①ふたば未来学園高校の生徒と交流。福島クイズで現状を知る
②「千年希望の丘」で植樹による減災を学ぶ



2日目は復興を担う人材の育成を目指し、昨年開校した福島県立ふたば未来学園高校(広野町)を訪問。同校の仮設校舎を建設した大和リースの井上伸一さんから話を聞いた後、地域づくり活動をする「社会起業部」の生徒らと交流した。

2年古内伸幸さんは「自然の力で発電する再生可能エネルギーを学びにドイツに行く」、1年林優弥さんは「地元のため役立てる大人になる」などと夢を語った。最後に、宮城県岩沼市にある津波対策の人工高台「千年希望の丘」取材。そこで植林活動をする「鎮守の森プロジェクト」の西野文貴さん(28)は「津波に耐えたシイやタブで森を造れば、自然の力で減災ができる」と説明。子どもたちも、密接して植えられたことで競争し合い、力強く成長した木々に触れていた。

「高校での交流会で、5年たっても再開できない店が多いことや、除染作業をしている人の苦勞を知って驚いた。福島はまだ、復興しなければいけないことがたくさんあると感じた」
陽明小6年・中村総秀くん(川西市)

「地震だけでなく、放射能の被害もあったのに、相馬の菊地さんたちは『古里を立て直す』という目標を立てている。前を向いている福島の人々に、本当の『強さ』を感じた」
鈴蘭台小5年・古川蓮さん(神戸市)